介護老人保健施設しおん

症　例　概　要　ご利用者　80代　　女性

利用期間　：令和6年10月よりしおん入所

病名：脳梗塞、高血圧症、高脂血症、糖尿病、骨粗鬆症、腰椎圧迫骨折

経過　：令和6年6月に入所していたシニアパンションにて転倒し救急搬送される。脳梗塞(今回で3回目）と診断され、その後遺症として右半身麻痺となる。
　同年7月にリハビリのある病院に転院し、状態も安定されたが自宅での独居生活が困難なことからリハビリも兼ね令和6年10月にしおんに入所される。

内　　容

入所時、3回目の脳梗塞による右半身麻痺もあり、車椅子への移乗や移動動作、排泄など全て介助を要し、また腰痛もあることから食事以外はベット上で生活する日々を送られていた。しかし、ご本人は前のように出来る事は少ないかもしれないが、自分の事は自分で出来るようになりたいという気持ちもあり、本人・介護員・看護師・リハビリ担当と各部門が集まり、担当者会議を開催した。ご本人の目標として、自分の身の回りの事を一人で行いたいという思いと、毎日手先の運動をしたいという要望が聞かれた。看護師からの意見として、腰痛については腰痛コルセットを使用してみてはどうかと意見があり、リハビリ担当からは現在の身体の状況を見て、筋力アップのリハビリを行なう意見が出た。担当者会議の翌日から毎日リハビリ訓練を行い、車椅子の自操や上着のボタンのかけ・外しをしたりと、片麻痺ながら自分で行えることが増え、腰痛コルセットを使用することで離床時間も長くなっていった。入所して間もなくご本人に趣味・嗜好調査をした際に、「昔は縫物をしていたけど、今はこの手（右片麻痺）だから何も出来ねんだ。」と出来ない事を話されていたが悲観せず、「その代わり出来る事をしていきたい。」と意欲的な発言もあり、毎日日課として広告紙で箱作りをし、ユニット創作活動にも進んで参加されるようになった。入所当時はあまり人とのコミュニケーションをとらなかったが、他ご入所者に箱作りを教え、自ら会話する事も増えてきた。ある日、ご本人から「箱作り以外にも何かやってみたい。」との話しがあり、能登半島地震の募金活動の一環として毛糸とビーズを使ったストラップ作りを行っている事、イベントで販売することを話し、サンプルで作ったのを見てもらうと「綺麗だねえ、やってみたい。」と昔の思い出話として縫物や編み物をしていた時の話もされた。ストラップ作り初日は片麻痺のため、なかなか思うようにいかない部分もあったが、ご家族の協力で気持ちが切替えられストラップを購入して頂くという目標を設定しあきらめずに完成させた。1つ完成させた後も、能登で被災された方を思いストラップ作りを続けた。イベント当日、ご本人の作ったストラップがたくさん並び感無量の想いで見守りました。結果、ストラップは大盛況でほぼ完売。ご本人の作ったストラップもたくさん売れた事、それで能登復興の支援が出来たことで新たな

喜びに満たされ、とてもいい表情をされました。ストラップ作りが終わった後も、出来ないではなく、出来るようになるという頑張り屋なご本人は今日もリハビリ訓練・創作活動を行っている。そんな充実できた生活を継続出来るよう、応援しサポートしていきます。